

七騎落伝承の展開

佐伯真一

治承四年(一一八〇)八月、伊豆の目代・山木兼隆を討つて旗を揚げた源頼朝は、石橋山に籠もつて戦つたが、多勢の平家方に敗れて脱出し、真鶴から海路、房総へ渡る。謡曲「七騎落」の素材となった史実である。しかし、『吾妻鏡』同年八月二十八日条には、頼朝が真鶴から、土肥実平が用意した船に乗つて安房へ向かつたとはあるものの、七騎で落ちたとは記されていない。おそらく、地元武士である土肥実平が船を手配して少数で逃げたことは事実だろうが、「七騎」という数を明記するのは、謡曲以前では、読み本系『平家物語』(延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本)や、真名本『曾我物語』である。このうち、真名本『曾我物語』は「七騎」という数を記すものの記述は簡略で、七騎の人名も実平の他に北条時政・義時の名を記すのみである。七騎という数を強く意識して人名をすべて明記するのは、右の読み本系『平家物語』諸本に限られる。

その中で、謡曲「七騎落」に近いのはどの本だろうか。七騎の人名では、謡曲に一致するものはない。延慶本・長門本・盛衰記は、土肥実平・遠平、新開二郎、土屋三郎、岡崎義実の五名まで謡曲と一致するが、その他に延慶本・長門本は実平の小舎人男・七郎丸、盛衰記は安達盛長を挙げていて、謡曲の言う田代信綱・土佐坊昌春を挙げるものはない。また、延慶本・長門本・盛衰記では、源頼義などの先例を記して「七騎」の数は意識するものの、頼朝一行が七騎だったのは、たまたまそうだったというだけで、「七騎」の数を合わせるために遠平を船から降ろしたなどという話はない。一方、四部合戦状本は、土肥実平・遠平、岡崎義実の他に北条時政・義時、土屋次郎、近藤七国平を挙げていて、人名の面では謡曲と相違が大きいものの、吉例たる「七騎」の数を守るために土肥遠平が船から降りたと語る点では、謡曲との類似が目される。

読み本系『平家物語』諸本は、いずれも土肥遠平を話題にするが、それは、遠平が敵方である伊藤祐親の娘を妻としていたため、裏切りを疑われるという内容であり、とりわけ盛衰記では、遠平が本当に裏切つたとも読めるような叙述になっている。しかし、四部合戦状本では、七騎を乗せて漕ぎ出した船に向かつて近藤七国平が自分を乗せろと要求するが、吉例にのつとつた「七騎」という数は崩せない。そこで土肥実平が、自分の息子ではあるが伊藤の旨でもある遠平を降ろせと申し出、遠平は抗弁するが、頼朝の裁定によつて遠平が船を降りたのである。謡曲のような「八騎は不吉の例」との記述はないが、「七騎」の数を守るために実平が息子の遠平を降ろすという展開は、謡曲にかなり似ているといえよう。四部合戦状本には、前述のように人名の相違などの問題もあつて、謡曲の直接的な典拠といえるものではない。だが、合戦に敗れて命からがら船出するさなかに、吉例だからといつて「七騎」という数にこだわりの人を降ろしてしまうというように、戦場の現実を離れた物語的ないし芸能的な記述において、四部合戦状本と謡曲が共通することは、やはり注目すべきだろう。具体的な関係のあり方は未詳だが、四部合戦状本に類するような伝承が何らかの形で存在し、謡曲の原拠となつたというように、とりあえずは考えられようか。

それを頼ることができる」という、実平の打算によるものだったと付記する。いわば、負けた場合に備えて保険をかけたというわけである。この点は戦場の生々しさを伝えていて、謡曲とは大きく異なる。謡曲では、愛息の佐奈田與一を失った岡崎義実の手前、襲い来る敵を前にして遠平を降ろさざるを得ない実平の煩悶を、涙あふれる美談として描くが、これは謡曲作者の創作と見るべきだろう。『平家物語』諸本の遠平は、伊藤入道の聲で裏切りも疑われる成年の武士だが、能舞台に登場する遠平は、けなげな子方に変貌している。また、『平家物語』諸本の世界では、武士の父親達は息子を愛し、息子に所領を残すために戦っているのであつて、主君のために息子を犠牲にするようなことはまずない。「七騎落」や「仲光」のような謡曲は、そうした意味でも、『平家物語』の世界からは離れている。なお、謡曲の後段、頼朝一行の船が和田義盛の船と出会う場面は、『平家物語』読み本系諸本に見えるものだが、義盛が平家方を装って遠平を救出し、実平に会わせたとするのは、謡曲作者の創作だろう。三浦一族は最初から頼朝側で奮戦していた。

さて、謡曲では「八騎」の不吉を言うが、『平家物語』諸本では「七騎」を吉例とする。「七騎」はなぜ吉例なのか。『平家物語』諸本が挙げるのは、源頼義の例である（盛衰記では天武天皇の故事も挙げる）。前九年の役の途中、

天喜五年（一〇五七）、黄海において頼義が安倍貞任に大敗を喫し、僅か七騎で逃げ延びたが、後に勝利したという話で、『陸奥話記』や『今昔物語集』巻二五・一三話、『十訓抄』巻六・一七話などにも見える。しかし、これらは七騎で落ちたことを特に吉例としているわけではない。「七騎落」を吉例としたのは、むしろ、『平家物語』以降というべきだろう。頼朝自身、奥州藤原氏を攻める際には、先例として頼義を意識していたようであり、頼義の先例と頼朝の七騎落を重ね合わせて吉例としたのは、あるいは、頼朝周辺から発したことであつたかもしれない。

『平家物語』以降、頼朝と頼義の七騎落伝承は、さまざまに広がっていったようである。たとえば『梅松論』下で、足利尊氏が九州に敗走する際に頼義や頼朝の七騎落の例を挙げ、「始の負は御当家の佳例」と、源氏の吉例として意識されている。『源威集』も頼義の七騎落を詳述し、「嘉例」として描いている。さらには、お伽草子『清水冠者物語』の一部の諸本に見られる清水冠者の七騎落も頼朝の七騎落と対比されており、さらに後期軍記の『里見代々記』『越州軍記』なども、頼朝七騎落を先例として意識する。「八騎落の不吉」よりは「七騎落の吉例」が一般的なのである。そうした中で、謡曲と同内容の「七騎落」は『狂言記』にも見え、また、古浄瑠璃にも受け継がれてゆく。

一度は敗れた頼朝が、立ち直って平家を倒してゆくまでの過程は、後に、中世の秩序の始源として強く意識され、さまざまの物語を生んだ。頼朝に対する貢献は、現実的な権益に結びつく伝承ともなり、各地でさまざまに語り継がれたようである。たとえば、勲功で所領をもらい、頼朝の「御判」を得て所知入―という趣向は幸若舞曲に多い。とりわけ、石橋山敗戦後、窮地に立った頼朝を助けた話は、かけがえのない功績として長く語られたはずである。たとえば、海上で頼朝に出会った和田義盛は、合戦に勝つたら自分を侍の別当にしてくれるよう、船の中で約束したという（延慶本・長門本・盛衰記）。頼朝を助けた伝説は、相模や房総に今も多く伝えられている。たとえば、JR真鶴駅の駅前広場には、「頼朝旗挙げ鍋」という巨大な鍋が飾られている。真鶴へ逃げてきた際、食事を与えてくれた人々への礼として、頼朝が「五味・青木・御守」の「真鶴三苗字」を与えたという伝説に基づくものである。僅かの敗残兵を連れたみじめな将がやがて勝利し、ついには日本全国を支配するほどの権力を握った―そのような結末を誰もが知っているために、頼朝拳兵の物語や伝説は、明るい祝言的な色彩に包まれているわけである。その中でも、七騎落は、頼朝の敗北から勝利への、まさに転換点といべき位置を担う物語であつた。

（青山学院大学教授）